

同じ和田村に生を享けて

田 中 隆 造

昭和五十五年六月十二日午後四時半、私は東京瀬田の大平正芳氏のご自邸に、六十余年の交友にお別れをさせていただくために参上いたしました。同日午前二時十五分、私と同じ村に生まれた偉大なる友は、正に卒然としてその生涯を終えたのであります。報道機関は挙げて一國の宰相の病状を伝えていたが、五月三十日初の衆参兩院同時選挙の冒頭、京浜の両都に出陣の大号令を果たして倒れ、入院加療を尽して未だ十日余にしてこの悲報を聞くとは、一億二千余万の国民の一人として誰が予想したであろうか。当日六月十二日は、私の職場である阪神電鉄の会社創立記念日に当り、物故先輩を合祀する阪神神社の例祭の日であった。早朝、首相の急逝に大きな衝撃を受けた私も、この行事は欠かすことのできないものであったので、これを終えてすぐ東京に直行した次第でした。ご令弟芳数氏のご厚意により私は邸内の一室に安置された御棺のなかの顔容に親しくお目にかかることができた次第です。大きな一生を最後まで力一杯歩み続けた男子本望の安らかな永眠の姿に、私は無限の感慨に打たれながら最後のお別れをいたしまして、心のなかで本当にご苦勞様でしたと深々と頭を下げた次第です。

私と大平首相は、香川県の西端、県境の和田村で生を享けたのです。私は首相より二つ年長ですが、首相の生家とは歩いて十分程の近くであり、大平家とは、私の父と首相のご尊父以来のお付き合いをさせていただいた仲です。首相のご令兄、故数光君とは小学校六年間を同じクラスで過ごしました。そして、首相とは二年違いで小学校四年間、三豊中学では三年間を共にしました。学年が違っていた故に、この学校生活は、いわゆる俺とお前

といった仲ではなく、ただ、中学へ通学するために通った豊浜駅への野道では、数人連れ立った上級生を先頭に一列になって歩んだ仲間の二人でした。当時の総理は、口数の少ない、温和しく感傷的な人柄で、目立たない存在でありました。したがって、あの当時の大平さんから総理はおるか、将来政治家となる片鱗さえ誰も予想することはできなかったと存じます。ただ生涯を通じて、変わることもなかった誠実さと優しさは、その時から備っていたものだと思えます。総理と同村の友人という間柄から、何かエピソードをと、マスコミの方々から求められて、その回答に当惑せざるを得なかったのも、少年の日の痛烈な思い出が私にはなかったためです。

中学卒業以後の総理と、私の歩んだ道は全く異なったものでした。それだけに、お互いに情報はよく知り合っておりましたが、私が学校を卒業以来、当時同郷の鉄道大臣三土忠造氏のお力によって今の会社に勤めて以来、終始、在阪の電鉄の仕事を続けてまいりましたのに、総理は、幾多の困難と試練を乗り越えて、遙かに高い国家的な仕事の遂行に尽力を続けられたのです。したがって、両者の途は、ますますその高さと距離を増して行き、ある意味で、総理は私にとって遙かに遠い存在になったにもかかわらず、総理は私の如き者にも常に変わらない厚情を寄せられたので、違った意味においては、極めて近い存在でもあったと私は考えております。

総理が、池田勇人氏との出会いにより、政治家として初めて代議士に選出された昭和二十七年、私もまた、会社の経営人の一環としてスタートを切った次第です。総理が一国を率いる地位につかれた昭和五十三年は、私も遅ればせながら会社を預る地位に就任しました。何か不思議な感慨を禁じ得ません。

昭和五十三年十二月、総裁就任の祝意を表したくご都合をうかがったところ、分刻みのご多忙のなかを都合していただき、自民党本部幹事長室で二人だけで手を握ってお祝いとご自愛を申し上げることができました。このことは、私にとって忘れ難い思い出として、いつまでも残ることと思えます。

(阪神電気鉄道社長)